

実は私、伯父さんに調教されています

～お姉ちゃん頑張るからねっ！～

両親が他界し、伯父さんの家に引き取られた私たち姉弟。
でも伯父さんはとんでもない人で私にエッチな事を強要しました。

今日からお前は
俺の肉奴隷だ

い...いや...っ...
今日は外に出してください...

これも弟を守る為...。
お姉ちゃん頑張るからね！

主君ごめんね
私、汚れちゃった...

何ふざけたこと言ってんだ？
このまま中に出すに決まってるんだろ？

基本CG18枚 合計890枚の大ボリューム



ミュキ
身長:156cm
B87/W58/H85

DOJIN
R18

成人向け

※18歳未満の
購入・閲覧禁止

「ミユキ、今度のGWはどこに行く予定あるのか？」

「うん。
家族で遊園地に行くんだ。圭君は？」

「俺？…特に何も予定ねえかな。
いいよなあ…お前のところは色々連れて行ってもらえて」

「圭君も一緒に行く？」



「い、いや…おばさん達に悪いしさ。
遠慮しておくよ」

「えー、全然遠慮しなくて良いのに。
お母さん達やコウタも喜ぶよ。昔みたいに一緒に行こうよ」

「いや…なんか緊張するしさ。
まあ俺は家でのおんびりゲームでもするわ。
家族水入らずで楽しんで来いよ（ミユキの父さんとか居ると緊張するしな…まだ付き合えてもないけど…）」

この人は幼馴染の圭君。
近所に住んでて、小学校の時から仲です。
冷たいようだけど、実はとっても優しいんです。
私はずっと彼に片思い中です。

「あ、もうお家ついちゃった…（圭君と居ると時間が本当にあっという間…）」

「まあ、学校まで比較的近いしな」

「…圭君。折角だし、久しぶりにお家あがっていく？」



「…ミユキの家に？」

「い、いや…いいよ。それじゃあ遊園地楽しんでこいよ！（ミユキの部屋に行ったら俺興奮してどうにかなっちゃうよ。この関係を壊したくないし…恋人にさえなればなあ…）」

「…うん（はあ…今日も駄目だった…。お家遊びに来て欲しいのにな…）。私、脈ないのかな…」

大好きな圭君と一緒に下校して、お休みの日は家族で仲良くお出かけ。
そんな当たり前で幸せな日常がこの後突然無くなってしまった。
だなんて夢にも思っていませんでした。

GW初日の朝、遊園地に向かう途中。
高速道路を走っていった私達は、突然大事故に巻き込まれてしまいました。

後部座席に座っていた
私と弟のコウタは怪我ですみましたが、
運転席と助手席に乗っていたお父さんとお母さんは……。

突然失ってしまった大好きな両親。
この先私達はもういなかったら……
私は悲しみに打ちひしがれました。

そして不幸はまだ続きました。

祖父や祖母も既に他界していて身寄りのなかった私達は、
ほどなくして伯父に引き取られました。

伯父はお父さんの兄で、亡くなった祖父達の家を継いで、
そこで独りで暮らしていました。

伯父はとてもたちが悪く、
ギャンブルや夜遊びが大好きなようで、良く借金をしていた
と聞いていました。

何年か前にお父さんが
『兄貴は事あるごとにしつこく俺に金をせびりに来るから
もう二度と会わない』
なんて怒っていたくらいです。
あの温厚なお父さんがそんなことを言うくらいなので、
当時は驚いていたのを覚えています。

昔はまだ優しい印象があったのですが…

「おい、コウタ！コウタ！
…ミユキ！コウタはどこ行った？」

「コ…コウタはお友達の家に行きました…（私が無理やり遊びに行かせただけ…あの子になるべくこの家に居ない方がいいもの…）」

「んだあ？使えねえ奴だな。
じゃあミユキ、お前が代わりに酒とタバコ買ってこい！」



「は…はい…（コウタにそんなものを買ってこさせようと
するなんて…）」

「チツ…あいつ、帰ってきたらまたしばいてやる」

「お、お願いですからコウタにはもう暴力を振るわないでください」

「ああ？誰に命令してんだ？
てめえらは俺が居なくちゃ何もできねえ癖によ……
一体誰のおかげで生活できると思ってんだ？！」

「ご……ごめんなさい……」

でもコウタはまだ私より8つも下で……（事故の慰謝料やお父さんたちの財産を私達から全部奪って行ったくせに……）」



「弟をかばうか。へへっ……良いお姉ちゃんしてるじゃねえか。
でもな。ああいう甘ったれた環境で育ってきた奴には少し教育
が必要なんだよ」

「あ……あんな暴力のふるい方は教育なんかじゃ……」

「なんだと？俺の教育方針に口出しする気か？」

「ごめんなさい…でも、コウタに暴力だけはやめてくださ
い…。何でもしますから…」

「…ほう。本当に何でもするんだな？」

「は…はい…（この気持ち悪い笑み…嫌な予感がする…）」



伯父さんは私の体をじつくりと舐めまわすように見ます。
こないやらしい視線は、ここへ来て
一度や二度ではありませんでした。

「今までずっと思っていたが、お前、中々いい体してるよ
なあ。昔会ったときは全然だったのによ」

「あ…あの…」

「弟の為なら何でもするんだよね？」

「は……はい……」

「それじゃあ夜、コウタが寝静まったらシャワー浴びて俺の寝室に來い。」

「……この意味、分かるな？」

「えっ……そ、そんな……い、嫌です……（何言ってるのこの人……まさかとは思ったけど、本当にしようとするなんて……。そんなの絶対嫌だよ……気持ち悪い……）」



「嫌ならいいんだぞ？その代わり、コウタは……」

「うう……（この人、コウタを人質に取る気だ……最低……）」

「可愛い弟を見捨てるなんて、ひどいお姉ちゃんも居たもんだよねあ？」

「……わ……わかりました……。行き……ます……。人の弱みにつけこんで……酷いのはあなたでしょ……」

「へへ…感心な娘だ。それじゃあ待ってるぞ?」

「は…はい…えっ…きやつ! (いきなり何するのよ…!)」

「…部屋にはその制服で来い。
今穿いてるようなダサいパンツじゃなくて、一番お気に入りの
を穿いてこいよ?」



伯父は私のスカートをなんの躊躇いもなくめくりながら
そう言いました。

「は…はい…」

この日から、私の地獄のような奴隷生活が始まったのです。

その日の夜。
コウタが寝静まった後、私はシャワーを浴びて、伯父さんの寝室に行きました。
部屋に入ると、伯父さんはパンツ一丁で待っていて、
私はすぐさまベッドに座られました。



「ちゃんと約束どおり来たな。お気に入りのパンツは穿いてきたか？」

「…はい」

「良い子だなあ？俺は良い子にすれば優しくする男だからな。
これから俺の言うことを聞くんだぞ？」

「……はい（こんな人の言うことなんかききたくない…）」

ミュキ

両親が突然他界し、弟のコウタと一緒に伯父さんの家に住んでいる。

面倒見もよく、心優しい性格。

弟の為なら何でもするという弟思いの優しいお姉ちゃん。
幼馴染の圭くんに恋心を抱いている。

普段落ち着いているが、とても明るい性格。

しかし伯父さんには常に恐怖を抱いており
言いたいことがあっても怖くて中々口にできずにいる。
伯父さんにより、後半は少し性格が変わってしまう。

趣味は読書。

妄想癖があり、実はとてもエッチ。
いつか幼馴染に襲われる事を想像しながら
毎日オナニーにふけっている。

スリーサイズはB87/W58/H85

